
魔法使いのいない国 第一部

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いのいない国 第一部

【Nコード】

N0729A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

魔法を禁止している国に、カラスを肩に乗せた風変わりな魔法使いの若者がやって来た。密かに魔法使いに憧れていたエリーは、戸惑いながらも次第に若者とうちとけていく。しかし、王の命令で魔法を使っていることがばれたら死刑になってしまう。そんな時、若者が魔法使いだということが分かってしまう…

第一話

日の沈みかけた街道を一人の若者が歩いていた。風変わりな帽子と黒いマントを身につけ、肩には一羽のカラスがとまっていた。しばらく行くと、道の脇に木の看板が立てかけられていた。

「ノースウィンドウ国

ここより魔法使いの侵入を禁ず。

魔法を使った者は、ただちに死刑に処す

国王より」

若者は、ヒューと口笛を吹き、肩のカラスにちらっと目をやった。

「禁じられれば禁じられるほど使いたくなるものは何かな？ カラス君」

肩のカラスは首を傾げる。

「それは魔法さ」

若者はニツと笑うと、看板の前で人差し指を軽く振った。すると、たちまち木に書かれた文字は消えていった。

「さあ、カラス君、お腹が空いた。今夜の宿を探すとするか」

カラスを連れた若者は、繁華街へと続く街道を歩き始めた。」

日暮れ近くから、居酒屋は段々賑やかになってくる。エリーが働いている宿屋兼居酒屋も旅の途中の人々でいっぱいになってきた。エリーは十八才。十才の弟サムと叔父の経営する居酒屋「旅の宿」に住んでいる。エリーの両親は五年前の流行りの伝染病で亡くなっていた。エリーは大きな夢を持っていた。居酒屋の仕事は好きになれない。けれど、今はここで働いていくしかなかった。

「お姉ちゃん！注文頼むよ！」

ここには品のない旅の男達が大勢やってくる。お酒が入っていると最悪だ。

「はい！少しお待ち下さい」

エリーは顔に引きつった笑顔を浮かべてテーブルに向かった。

「姉ちゃん美人だなあ。どうだい今夜俺とつき合わないか」

ひげ面の男がいやらしい笑みを浮かべる。エリーは軽く咳払いする。

「えーと、ご注文は？」

「俺は姉ちゃんが良いよ」

連れの男がそう言うのと男達は声を立てて笑った。エリーの笑顔はますます引きつる。

「ご注文お願いします！」

「おお、怖え」

「姉ちゃん、怒った顔も魅力的だぜ」

男どもは大声で笑い合う。

「…また、後で参ります」

エリーは怒りを抑えながらさっさとテーブルを離れた。

（ここに来るお客ってなんでこんなに下品なんだろ。紳士淑女なんて来た試しがないわ） 「旅の宿」は料理と宿代が安いのが売りだから、仕方のないことでもあった。

と、居酒屋のドアが勢いよく開きドアのベルがカランとなった。また、お客だ。

「いらっしやいませ！」

エリーは反射的にくるとドアの方を振り向いた。仕事柄、顔は自然と笑顔になる。

開いたドアから一人の若者が入って来た。

「……」

黒い奇妙な帽子、黒いマント、肩には真っ黒なカラスが乗っている。色々な国から、ここノースウィンドに旅人が訪れるが、こんな奇妙な格好をした者は初めてだった。

若者は込み合っている店内をゆっくりと見渡した。

「お嬢さん、席は空いているかい？それと今晚の宿も取りたい」

若者はまっすぐエリーを見つめた。目深にかぶった黒い帽子の奥で、澄んだ緑色の瞳が光る。吸い込まれてしまいそうな美しい緑の目だった。

「え、ええ：こちらにどうぞ」

一つだけ空いていた席に、エリーは若者を案内した。若者が席に着くと、肩に乗っていたカラスは若者の隣りの椅子に飛び移った。

「あの：ご注文は？」

「うーん、そうだな、まずは温かいミルクをいただくとしようか。」

「はい、かしこまりました」

「あ、ちょっと」

そそくさと立ち去ろうとするエリーに若者が声をかけた。

「ミルクは二人分頼むよ。カラス君もミルクが好物なんだ」

椅子の上のカラスがかあと不気味に鳴いた。

「……」

エリーはぞつとして奥に駆けていった。

夜も更けていき、居酒屋のお客も帰るか宿の方へ引き上げて行った。エリーは叔母夫婦と店の後かたづけをしていた。毎晩仕事が終わるのは十二時過ぎだ。疲れ切ったエリーは眠い目をこすりながら、テーブルを拭いていった。

と、椅子の上に小さな本が一冊置かれていた。古びた黒い表紙の本。

エリーは本を手にとって見た。

「忘れ物かな？」

エリーはパラパラと本をめくった。

「：！！これは……」

はっとして、思わず本を胸に抱く。ここには確かカラスを連れた黒いマントの若者が座っていたはずだ。

「エリー！テーブル拭いたらもう休んでいいよ。洗い物は終わった

からね」

厨房から叔母が声をかけた。

「え、ええ、分かった」

エリーは慌てて本をエプロンの中に隠した。

第二話

皆が寝静まった後、エリーはある部屋のドアをそっとノックした。しばらく待ったが何の反応もない。エリーは用意していた合い鍵を使って、静かにドアを開いた。

真っ暗な室内。耳をすませると、規則正しい安らかな寝息が聞こえる。エリーは足音を立てないようにして、旅人の休んでいるベッドに近づいて行った。暗闇に目が慣れてくると、窓辺の椅子の背にカラスがとまって眠っているのが見えた。

エリーは、ベッドで寝ている 若者の顔を覗き込んだ。

「あっ!…」

突然若者が身を起こすと、エリーの腕をつかんだ。

「お嬢さん、レディが真夜中に男の部屋に忍び込むとは、どういうつもりだね?」

若者はつかんだエリーの腕を引き寄せた。

「…! 放してよ!」

エリーはもう一方の手で、若者の頬を思い切りぶった。パチン! という大きな音に、眠っていたカラスが飛び起きてカアカア鳴いた。若者はエリーの腕を放し、エリーは後に引いた。

「いたた…すごい力だね」

若者はエリーに叩かれた頬をさする。

「ごめんなさい…いきなり腕をつかむから…」

(…でも、勝手に忍び込んだのは私よね)

エリーは、すまなさそうに 若者を見つめた。

「…それで? 夜這いでも、盗みでもないなら、忍び込んだ理由は何かな?」

「それは…これよ!」

エリーは胸元に忍ばせていた小さな本を、若者の目の前につきだした。

「これ、あなたが忘れていた本ね？」

「ああ、確かに僕の本だね。ま、たいした本じゃないよ。その本の中身は全部ここに詰まっているから」

若者はにと笑って、頭を指さした。

「じ、じゃあ、あなたこの本の内容は全部分かるって言うの!？」

エリーは驚きのあまり、言葉を詰まらせた。

「て、言うことは、あなたは…あなたは…」

「魔法使いダリルさ」

涼しげな顔でダリルという魔法使いは答える。

「そんな…魔法使いだなんて!あなた、この国では魔法を禁止されていることを知らないの?もし、魔法使いだって分かったら…」

「死刑らしいね」

「そんなに簡単に言わないでよ!…」

「心配してくれるのかい?嬉しいね」

「明日の朝、すぐにここを出ていった方がいいわ」

「心配いらないよ。僕は偉大な魔法使いダリルだからね」

「……」

全く気にしていないダリルに、エリーはあきれた。

「偉大な魔法使いは、自分のことをそう言わないわ」

「そう?君は魔法使いのことに詳しいのかい？」

エリーはドキッとして、手に持った本を強くつかんだ。

「…とにかく、ここは早く出て行って。魔法使いをかくまえば罪になるんだから」

エリーは本を手にしたまま、足早に部屋を出ていった。

「返すの忘れちゃった…」

自分の部屋に戻ったエリーは、ダリルの魔法の本に気付いた。部屋の奥のベッドでは、弟のサムが安らかに眠っていた。そっと近寄りサムのあどけない寝顔を見つめる。

(あの時魔法が使えていたら…)

五年前、平和なこの国に伝染病が流行した。病はエリーの両親の命を奪い、サム聴力を奪った。国の4分の1の人の命が奪われた。サムが寝返りをうち、毛布がめくれた。エリーはそっと毛布をかけ直す。

（いつかサムと一緒にこの国を出ていくわ。私も魔法の勉強がしたい…）

エリーは魔法の本を抱きしめる。魔法使いになること、それは誰にも言えないエリーの夢だった。

第三話

翌朝。朝食の準備をしにエリーが居酒屋に下りていくと、叔母夫婦と近所の人々が興奮気味に話し合っていた。

「それ、本当なのかい？」

「間違いないさ、立て札の文字が綺麗に消えていたんだって！国王に見つかったらえらいこった」

「子供が悪戯して消したんじゃないのかい？」

「いいや！魔法でも使わない限り、あんなに跡形もなく消えやしないさ！」

エリーはビクツとして思わず息を潜めた。

「しっ！声が大きいよ。魔法だなんて…」

叔母は誰もいないことが分かっているながらも、辺りを見回した。

「恐ろしいこと言うんじゃないよ」

エリーは軽く咳払いすると、叔母達の元に歩いて行った。

「おはよう」

「ああ、おはよう、エリー。後で市場まで買い物頼むよ」

「ええ、サムと一緒に行って来るわ」

市場に食料品の調達に行くのは、エリーの楽しみの一つでもあった。

「エリー、知ってるかい？この国に魔法使いが来たらしいよ」

近所の婦人は興味津々でエリーに話しかける。

「…魔法使いなんているわけじゃないじゃない。さ、早く食事の準備しなきゃ。みんな起きてくるわよ」

エリーはそう言うと、そそくさと厨房に入って行った。

朝の仕事が一通り終わると、エリーはサムを連れ、荷台を引いた馬車に乗って市場に出掛けた。手綱を引いて馬車を走らせると、爽やかな朝の風が心地良い。サムは楽しそうに身を乗り出して街の景

色を眺めている。市場までの十五分足らずの道中は、エリーとサム
の幸せなひとときだった。

市場は今日も方々から作物や衣料を売り買いする人々で賑わって
いた。エリーは顔なじみの売人から次々と食料品を買っていった。
みるみる荷台は新鮮な食料でいっぱいになっていった。

「エリー！」

買い物が終わりにかけた頃、エリーは人混みの中から声をかけられ
た。

「リリー」

幼なじみのリリーが笑顔で駆け寄って来る。彼女はもうすぐ結婚
が決まっていた。同い年なのに、最近リリーは大人っぽく女らしく
感じられる。

「買い物はもう終わった？」

「ええ、もう荷台に積み込めないわね」

エリーはフツツと笑った。リリーとは小さい頃から一緒によく遊
んだ。色んな話をし相談しあった。エリーの両親が亡くなった時も
リリーは心からエリーを支えてくれた。そのリリーが結婚してしま
うのは、少しばかり寂しかった。リリーには大切な人が出来たのだ
から、もうエリーだけのリリーではなくなってしまったような気が
する。

「今から仕立屋に行くところなの。そこまで一緒に行かない？」

「あ、ウェディングドレスの仕立てね。良いわよ、馬車に乗って行
くといいわ。彼は一緒じゃないの？」

「後から来る予定よ。もうだいたいのデザインは決まってるんだけ
ど」

リリーは心から幸せそうな笑顔を見せた。誰も邪魔することは出
来ないような強い幸せをエリーは感じた。

色々な商売人が広げている商品を興味深そうに眺めているサムの
元にエリーは駆け寄った。サムはたくさんのお菓子を売っている商
人にくぎ付けになっている。エリーはサムの肩を叩いた。振り向い

たサムの顔を見ながら、

「サム、帰るわよ」と言った。ゆっくり話せば、耳の聞こえないサムも口の動きで言ってることが分かった。サムは不満そうな顔を浮かべ、「まだ、いたい」と短く言った。

「だめよ、リリイを送って行くんだから」

「サム、珍しいキャンディを買ったのよ。サムにもあげるわ」

リリイは棒のついた色とりどりのキャンディをサムに見えるよう掲げた。

「わあ、すごい！」

サムはすぐにリリイの元に駆け寄って行った。

「リリイはやさしい。ぼくもリリイとけっこうんしたい」

サムはリリイからキャンディをもらい、上目遣いにエリーを見上げる。

「何よ、さっさと馬車に乗りなさい。最近生意気なんだから」

エリーは少しムツとしてサムを馬車に押し上げた。 リリイはにこにこしながら、

「あなた達仲がいいわね」と言った。 幸せな人は何を見ても何があっても楽しいのだろうと、エリーはつくづく思った。

三人で荷馬車に乗りとことこと走って行くと、商店の並ぶ通りに出た。リリイの行く仕立屋もその並びにあった。そのすぐ近くまで来た時、

「あの人何してるのかしら？」

リリイは斜め前方を見ながら言った。エリーもそちらに目をやると、黒い人影が箒を手に持ち上に上げ下げしていた。エリーの顔がひきつっていく。

第四話

「ダリル!!」

「やあ、昨夜の夜這いのお嬢さん」

ダリルは店先の箒を数本、手に持ち上げて振った。

「エリーの知り合いなの?」

リリイは目を丸くしてエリーを見つめた。

「ち、違うわよ!ただの宿屋のお客よ」

(なんでまだここにいろの?!しかも魔法使いが箒だなんて、あやしすぎるじゃない) エリーは、今にもダリルが箒に乗って空を飛ぶんじゃないかと思い冷や冷やした。

「カラス!」

サムが空を指さして言った。空を旋回していたカラスが、ゆつくりとダリルの肩に降りてきた。不気味な声で鳴くカラスに、リリイは小さく悲鳴を上げた。エリーは手綱を引くと、ダリルの元まで馬車をつけた。

「お客様!今朝出発されるんじゃないかったですか?」エリーは皮肉を込めて言った。

「この国が気に入ってね。もうしばらくいることにするよ。良い箒もたくさんあるようだ」

ダリルは両手に持った箒を持ち上げてウィンクした。

「でも!」

(なんて呑気なの。状況がまるで分かってないわ。立て札の文字までイタズラして) エリーはダリルの態度に苛立ちを覚えた。

サムは荷馬車から身を乗り出して、ダリルの肩にとまっているカラスを見つめていた。カラスをこんなにも近くで見るのは初めてだった。

「名前はカラスだよ」

サムは驚いてダリルを見た。ダリルは微笑んでサムを見つめ返し

た。

（今、名前を聞こうとしたんだ）

「だから教えてあげたんだよ」

（え？？僕何も喋ってない）

「口で話すより簡単だろ？」

（思ってることが分かるの！？）

エリーは一人で喋っているダリルを怪訝な顔で見つめた。

（お兄さん、すごいや！唇の動きを見なくても話が出るのって便利だな）

サムは満面に笑みを浮かべた。

「エリー、彼変わっているけどとてもハンサムね」

リリイはエリーの耳元で囁いた。

「え？…」

「送ってくれてありがとう。エリーに素敵な彼が出来たなんて知らなかった。今度ゆっくり話を聞かせて」

リリイはエリーの顔を見て微笑むと荷馬車を降りた。

「あ、ちよつとりリイ。違うわよ…」

リリイは手を振ると仕立屋の方に駆けていった。

「彼女、綺麗だね。ま、結婚相手から奪ってしまっっては相手が可愛そうだな」

エリーは軽いため息をつく。

「お客様、宿にお連れしますわ」

「まだ買い物が終わっていないんだ。もう少し待ってくれるかい？」

「もう時間です。どうぞお乗り下さい！」

エリーはダリルを睨んで、ぴしゃりと言った。

「やれやれ、せっかちなお嬢さんだな」

ダリルは箒を店先に置くと、ゆっくりと荷馬車のサムの隣りの席に座った。サムは尊敬の眼差しでダリルをみている。

「ダリル、ともだちになって」

エリーの心配をよそに、サムは心の読めるダリルがすっかり気に

入っていた。

第五話

ダリルは一向に旅立つ気配を見せなかった。宿屋に戻ってからは、ずつと部屋にこもったままだ。外を出歩くよりはまだまし、とエリーは思いながらお客用のシーツ類の洗濯にとりかかっていた。宿屋の仕事は朝から晩まで忙しい。今日は風が強いし天気がいいからよく乾くだろうと思い、せっせとシーツを洗濯し宿屋の裏庭にシーツを干していた。サムはその側に座り紙に絵を描いていた。サムは絵が得意だ。耳が聞こえなくなっただけからは、特に絵を描くことに夢中になっていた。

木と木の間に紐をかけ、シーツを干していたエリーは、サムが描いている絵をそつと眺めた。白い紙一面に真っ黒なカラスが大きく描かれている。あまりのリアルな描写にエリーはぞつとした。エリーはサムの肩を叩き、顔を上げさせた。

「そんな絵描いちゃダメ！もつときれいな鳥を描いて」

「カラスくんは、きれいなとりだよ」

サムはむつとしてエリーを見上げる。

「『カラス』っていうのが、カラスくんのなまえなんだ。ダリルがいった」

「あの人と気やすく話しちゃダメよ」

「なんで？ぼくとダリルはともだちになったんだ。ダリルはぼくのおもっていることがぜんぶわかるんだよ」

「ダメなの！あの人は普通の人じゃないの。もうすぐしたらここから出ていくんだから」

「エリーはいつも『ダメ』ばかり！いじわるだ。ダリルはぼくのもだちだ」

サムは顔をそむけ、またカラスの絵を描き始めた。

「……」

エリーは、必死になって絵を描くサムを黙って見下ろした。サム

には遊び相手になる友達がいなかった。耳が聞こえず上手く会話が出来ないことも、友達作りのハンデになっている。と、その時突風が吹き抜け、まだ洗濯ばさみでとめていなかったシャツが、エリーの手元を離れて空に舞い上がった。

「あっ!…!」

シャツは宿屋の屋根にふわふわと着地した。

「あゝあ、屋根の上に飛んでいっちゃった」

エリーとサムが宿屋の屋根を見上げていると、二階の窓が開きダリルが顔を覗かせた。「どうやらお困りのようだね」

「ダリル!」

サムは大きくダリルに手を振った。

「シャツがやねにあがっちゃった」

「いいの!後で私が取りに行くから」

窓から身を乗り出して屋根のシャツを見上げているダリルに、エリーは慌てて言った。こんなところで魔法を使われたら大変!エリーがそう思った矢先に、ダリルはもう指を動かしていた。

「君が屋根の上に?…君なら行けるかな?でも、屋根が壊れるとまづいからね」

「!…!」

ダリルは軽く指を回して何か呟いた。と、屋根の上に覆い被さっていたシャツはゆっくりと起きあがり、まるで中に人が入っているかのような動作でふわふわと舞い降りてきた。サムは口を大きく開けたままシャツに見入っている。シャツはワルツを踊っているように回りながら、ふわっとエリーの手の中に到着した。

「すごい!すごい!すごい!」

サムは飛び跳ねて喜んでいる。

「ダリル!もういっかいやって!」

裏庭を見下ろしているダリルがもう一度指を動かそうとしたので、エリーは慌ててシャツを紐にピシッとかけ直し洗濯ばさみではさんだ。

（今はよした方がいいな）

ダリルの心の声がサムの耳に聞こえた。

「すごい！ ぼくもダリルのこえがきこえるよ！」

サムは興奮して叫んだ。

（エリーをこれ以上怒らせたら怖いから、今はやめておこう）

無言でダリルを睨んでいるエリーを見て、ダリルはサムにウィンクした。

（分かった！）

サムも笑顔でダリルにウィンクを返した。

第六話

エリーは乱暴に客室のドアを開けた。ベッドにはダリルがごろんと横になっていた。口には棒つきキャンディをくわえ、棒の部分だけ口から出して口をもぐもぐさせていた。エリーはダリルを無視し、掃除用具を抱えるとつかつかと中に入って行った。ダリルは半分身を起こし、エリーの様子を目で追った。

（君はいつもノックせずに部屋に入って来るのかい？）

ダリルの声がエリーの心の中に響いた。エリーはビクツとしてダリルを振り返った。ダリルはキャンディをくわえたまま、呑気に微笑んでいる。

「私は耳が聞こえるの。言いたいことは口で言って！」

「君は部屋に忍び込むのが好きだね」

「私は部屋の掃除に來ただけ。昼間はみんな出て行っていないの。部屋にいるのはあなたただけだわ」

「部屋に連れ戻したのは君なんだけどね」

「!……」

エリーはプイとダリルから顔をそむけ、部屋の掃除に取りかかった。

「魔法の本はもう読んだかい？ あれは初心者向けだから、君にも分かると思うよ」

エリーは床を拭くモップの手を止めた。

「あの本は後で返すわ。私には必要ないから」

「本当に？…君にあげようと思っていたんだがね。君は随分魔法に興味があるようだし」

「き、興味なんかないわ！…それと、サムには近づかないで。あの子は魔法の存在さえ知らないんだから、絶対あの子の前で魔法は使わないで」

「何故、そんなに魔法を嫌うんだろうね？魔法を使えば掃除もあつ

という間に終わってしまうんだよ」

エリーはダリルを警戒して、モップを握りしめた。

「魔法は不幸を呼ぶわ。ずっと昔、この国で魔法使いどおしの争いがあったのよ。権力をめぐって魔法を使った戦いが始まった。魔法の攻撃で多くの人が犠牲になったらしいわ。だからそれ以来この国では魔法を使うことを禁止されるようになったの。魔法使いは国を滅ぼすことになるから」

「それは悪い魔法使いのせいさ。君は時々思っていることの反対のことを言うんだね」

ダリルはフツツと笑った。

「私は魔法使いが嫌い！人の心を読むなんて失礼だわ」

エリーは頬を膨らませ、掃除を再開した。その時羽音がして、窓からカラスが入って来た。

「カラス君のお帰りだ。キャンディを食べるかい？サムのキャンディは僕には少し甘すぎるな」

ダリルは食べていたキャンディを、カラスに向かってふわっと投げあげた。キャンディはスローモーションでカラスの元まで飛

んでいき、カラスは足で上手くキャッチした。

カアと鳴くと、

カラスは足にキャンディを持ってなめ始めた。

「……」

（魔法は悪いこと。魔法使いは嫌い…）

その光景を眺めながら、エリーは自分に言い聞かせた。

第七話

『魔法は不吉なもの、魔法使いは悪者』 何度も何度も自分の胸に言い聞かせても、エリーの心にはそれを上回る魔法に対する憧れにも似た気持ちが沸き上がってくる。魔法のことを否定すればするほど、魔法への興味が募ってくるのだった。

ダリルは全てお見通し、彼の心の目はエリーの気持ちをみんな知っていた。ダリルの魔法の本は、まだ開いていなかった。読んでみたい気持ちとそれを恐れる気持ちが、葛藤している。魔法使いだということがばれたら死刑になるのに、ダリルは何故あんなに落ち着いているんだろう？ダリルの呑気なくらいお気楽な様子が、エリーには理解出来なかった。

夕暮れになり、「旅の宿」は今日も旅人達で賑わい始めていた。店の中はお客達の陽気な笑い声や話し声で沸き上がっている。ダリルは今夜もカラスと共に、店の片隅のテーブルについていた。エリーは彼の姿を見つけると、そっとテーブルに近づいて行った。

「温かいミルクを二つ。料理は適当に任せるよ。味はまあまあだったな」

「分かりました…」

上目遣いにエリーを見上げたダリルの前に、エリーは魔法の本を差し出した。

「まだ返さなくていいよ」

そのまま立ち去ろうとしたエリーにダリルは言った。

「しばらくこの国にとどまるつもりだ」

「私には必要ないわ。…それにあなたはここを出て行かなきゃ…」

エリーは回りを気にして小声で言った。

「明日にでも出て行って」

「惜しいなあ、君には魔法使いの素質があると思うんだが…」

エリーは『魔法』という言葉聞いてドキリとした。

「魔法なんてことを言わないでよ」

ダリルの耳に顔を近づけて囁く。 と、ダリルの甘い声が胸に響いた。

（そんなことしなくてもいいさ。心の声で聞けばいい。まあ、君が僕に近づきたいというのならいいけれどね）

透き通った緑色の目が、エリーの間近で笑った。エリーは慌てて顔を離れた。顔がぱあっと赤くなる。

「…とにかく、この本は返します！」

エリーはくると後ろを向くと、ダリルのテーブルを離れていった。後ろからダリルの笑い声が小さく聞こえた。

（何よ、全く！いつもにやけた顔して、魔法使いのくせに威厳ってものが全然ないんだから！）

「姉ちゃん、注文頼むよ！」

既にほろ酔い気分のお客が近くで手を挙げた。

「お待ち下さい！後で伺います！」

エリーはキツと客を睨んでそう言うと、スタスタと厨房に向かった。酔っぱらった客達がヒューツと口笛を鳴らした。

「相変わらず恐い姉ちゃんだな」

「愛想良くしねえと可愛くないぜ！」

「まあ、気の強い女も俺は好みだけだよ」

客達の笑い声が店内に響く。

（もう！私の回りにはろくな男がいないんだから。男なんか大嫌い！）

エリーの怒りはピークに達する。

「ホットミルク二つと適当に料理を作って、安い肉と古い野菜で構わないから！」

エリーは厨房に向かって叫んだ。

第八話

翌日もダリルはノースウィンドウを去らなかった。

エリーの心配をよそに、穏やかな日差しの中ふらりと街の探索へ出かけていった。『あんな魔法使いのことなんか知らない。どうだろうと私には関係ない』エリーはそう思うようにして、普段通りの一日を始めることにした。だが、『君は思っていることの反対のことを言う』と言ったダリルの言葉が、ずっと頭から離れなかった。否定すれば否定するほど大きく膨らんでいく魔法の魅力：その気持ちを必死で押さえている自分にも気づいていた。

エリーがいつも通り客室の掃除をしている間、サムは一人で宿屋の外に出ていた。宿屋前の石畳に、チョークで夢中になって絵を描いていた。

（ダリルはカッコイイなあ。大人になったら僕もあんな格好がしたい！カラスの友達もほしいや）

白いチョークでダリルを描き、その肩にはカラスを付け足した。自分の描いた絵を眺めてうっとりしていると、突然コツンツと頭に石が飛んできた。

「いたっ！」

サムが頭に手をやって振り返ると、サムと同じ年くらいの少年達がサムを見て笑っていた。

「何やってんだサム？」

少年達はサムの回りに集まってきた。

「また変な絵描いてるよ。気味悪い」

「ヘンテコな格好、カラスまで描いてるよ」

「へんじゃない！ぼくのともだち！」

サムはムツとして立ち上がった。

「へんじゃない！ぼくのともだち！」

少年達はサムのたどたどしい言葉を真似て笑い合った。

「まあ、のろまなお前にはカラスの友達がちょうどいいよな」

「かしな！」

「あっ！」

少年の一人がサムの手から無理矢理チョークを取り上げた。そして、サムの描いた絵をチョークでめちゃめちゃに塗りつぶし、その横に『バカ』と大きく書いた。サムは悔しくて泣きそうになり、宿屋に戻ろうと駆けだした。と、すかさず足を蹴られ、サムは前につんのめってドサツと倒れた。

「ドジな奴！」

「またエリーに言いつけに行くのか」

「いつもエリー姉ちゃんにくつついてるもんな」

「一人じゃ何も出来ない弱虫サム！」

少年達は声を上げて笑った。

石畳の上にうつぶせに倒れたまま、サムは体を震わせた。少年達の顔が見えないから、何を言っているのか分からない。けれど、自分をバカにしてからかっているのは分かる。

（耳が聞こえるようになっていたい！もっと強くなってみんなをやっつけてやる！）

サムの目から大粒の涙が流れた。

第九話

涙が石畳の上にポタリと落ちたとき、サムの心の中に柔らかな声が響いてきた。

（君の絵は上手いけどね。僕とカラス君は、もう少し男前じゃないかい？）

「ダリル！」

サムは身を起こし、ダリルの姿を探し辺りを見回した。そこにダリルの姿はなかったが、少年達の恐怖に満ちた顔があった。見ると、サムの描いたダリルの絵が石畳を離れてむくむくと起きあがり宙に浮かんでいた。白いチョークで塗りつぶされたため、体は白い線でくしゃくしゃになっている。白い線で描かれた奇妙な絵の生き物が、ふわふわと浮かんで少年達の回りを飛んでいた。

「な、なんだこれ！」

「お、お化け?!」

肩にだらんとのかかったカラスが「ガァッ!」と不気味に鳴いた。少年達は悲鳴を上げると、一目散に走った。不気味な絵の生き物は、ふわふわ揺れながら彼らの後を追う。しばらく彼らを追いかけて回した後、ふわふわと舞い戻って来て石畳の元の場所におさまった。

サムは目を丸くし、その場に立ちつくしたままその様子を見守っていた。と、その肩に背後から手が乗せられた。見上げるとカラスを連れたダリルが立っていた。

（やれやれ、美青年がだいなしだね）

ダリルはサムの描いた絵に目を落とす。肩のカラスもカァと鳴いた。

（今度はもっともって格好良く描くよ!）

サムは涙を拭くと、笑顔を見せた。

（フンフン、ならこの絵は消しておこうか）

ダリルがパチンと指をならすと、石畳の上の絵はたちまち消えていった。

（ダリル、すごいや！どうやって消したの？！）

（ほんのちょっとした魔…）

ダリルは軽く咳払いした。

（このことはエリーには内緒だよ）

（なんで？）

（うーん…男同士の秘密にしておこう）

ダリルはサムにウィンクしてみせた。

（分かった。僕とダリルの秘密だね！）

サムも笑ってウィンクを返した。

「そうそう、エリーの機嫌を損ねると宿屋の料理がどんどんまずくなっていくんだよ」

「…？」

最後の言葉はサムに分からなかったが、サムは心から嬉しかった。今やダリルはサムのヒーローのような存在だ。

第十話

ベッド脇のテーブルの上に、「魔法の本」はあった。

ダリルの客室の掃除に来たエリーだが、どうしてもその本に気を取られてしまう。

（私には関係のない本だわ：昨日返したばかりじゃない）

言い聞かせてベッドの下を箒で掃こうとした時、窓から風が吹いてきて、パラパラッと本のページをめくった。自然と本に目がいく。

古代文字のような呪文の言葉が太字で書かれ、その説明と小さな挿し絵が見える。

旅の商人達から、魔法使いの噂はよく聞いていた。両親にはきつく禁止されていたが、内緒で魔法の話を聞かせて貰っていた。小さい頃、箒にまたがって空を飛ぶ真似もしたことがある。

『なぜ魔法使いは来ちゃいけないの？なぜ魔法を使っちゃいけないの？』

そんな質問をしては、両親を困らせていた。

「魔法か：私にも空が飛べるのかしら？：」

ふとエリーにイタズラ心がわき、ドレスの裾をめくって掃除用の箒にまたがってみた。

（空が飛べたらいいな…）

フツツと笑った時、いきなり部屋のドアが開いた。そこにはダリルとサムが立っている。

「あっ、あの：」

エリーは足に箒を挟んだまま固まってしまふ。ダリルはフツツと笑った。

「もしかして空を飛ぶつもり？」

「ち、違うわよ！」

「何なら僕が力を貸そうか？」

「やめて！」

指を動かそうとするダリルを見て、エリーは慌てて箒を引き抜いた。箒を振り上げたひょうしに、箒がテーブルの上のガラスコップにあたり、コップが床に落ちてくれた。割れて粉々になったコップを見て、気が動転しているエリーは素手で破片を拾おうとかがんだ。

「あいたっ…」

指が切れて血がにじむ。それを見てサムが駆け寄ってきた。

「エリー！だいじょうぶ？」

心配そうに顔を覗き込む。

「平気よ。ちょっと切っただけだから」

エリーはサムに笑顔を見せた。と、ダリルがつかつかと歩み寄ってきた。

「どれ、見せてごらん？」

「大丈夫よ！」

ダリルは強引にエリーの右手を取った。人差し指から血が流れている。

「結構傷口が深いな…」

エリーとサムが見守る中、ダリルは片手をエリーの指にかざし低く何か呟きながら、円を描くように手を動かした。と、みるみる傷口はふさがっていき、指の血は引いていった。

「……」

エリーとサムは驚いてその様子を見つめた。

「ダリルはてじなしみたいだね！？どんなトリック??」

サムは感心してダリルを見る。

「僕は手品師じゃないからね。トリックは、なしだ」

そう言うと、軽く握ったエリーの手を引きよせ、そっとキスした。

「ひゃっ！何すんのよ！」

エリーはドキッとして手を引っ込めた。

「君の手があまりに荒れてたもんで、きれいにするおまじないをしたのさ。左手もやっておこうか？」

「……」

エリーは自分の手を見つめ、おずおずと左手を差し出した。ダリルはニツと笑うと左手の甲にも軽くキスした。

「効果は明日でるよ」

エリーは不思議そうに両手を見ながら立ち上がった。

「ダリル、ぼくにもやって!」

サムは無邪気に両手を差し出す。

(このおまじないは女性限定なんだよ)

ダリルはサムの心に伝えた。

第十一話

（魔法は戦いの手段だけじゃない。傷や病気の治療も出来る…）

その夜、部屋の鏡の前に座り髪をとかしながら、エリーは思った。（あの時魔法が使えていたら、多くの人の命が助かったかもしれない。父さんや母さんも死なずにすんだ。サムの耳も聞こえた。もし私が魔法を使えたら…）

エリーは髪をとく手を休め、ダリルが治した手の指を見た。傷跡は跡形もなく消えている。痛みも全くない。

（魔法は本当に悪いこと？魔法使いは悪者？…）

鏡の中の自分に問いかけてみる。答えはもうとっくに分かっている。

と、部屋の外から微かな音が聞こえ、コツコツとドアを叩く音がした。

「誰かしら？」

エリーは立ち上がると、警戒しながらそっとドアを開けた。

「！？……」

そこには「魔法の本」が浮いていた。正確には「魔法の本」に白い羽がはえ、パタパタと羽ばたいていた。

「何これ？」

「魔法の本」は、ドアの隙間をぐり抜け、パタパタと浮き沈みしながら部屋に入ってきた。そして、しばらくエリーの回りを飛び回った後、エリーの両手の中に着陸した。それと同時に白い羽は消え、表紙に赤い文字が浮かんできた。

『私は必要とされている人の元にまいりました。今日からあなたが私のご主人様です』

「え？…」

赤い文字はすぐに消えて、また別のメッセージが浮かんだ。

『手荒れにはオリーブオイルと僕のキスがよく効くーダリルー』

「?……」

(ダリルは変な魔法使い!…でも…)

赤い文字が本の中に消えていった後、エリーはそっと本を抱きしめた。何かがふっきたような、温かな安らぎが胸の中に広がった。
(私は魔法が好き…)

エリーは「魔法の本」を胸に抱き、微笑んだ。

第十一話（後書き）

ようやく物語の前半が終わったような感じです。（^^;）これから最初は設定しなかった登場人物も出てきたりして^^;、物語が展開していくと思います。どうぞ、温かい目で見守っていてください。感想メッセージいただけると嬉しいです。（^ー^）

第十二話

（魔法使いが入ったか…）

城の見張り台から、街を見下ろす一人の男がいた。大柄で威厳のあるたたずまい。口髭を生やし、目つきは鋭かった。

（だが、たいした威力はないな…ほうっておくか）

「リシリー様」

男の後ろから声がした。男はゆっくりと振り返る。そこには、若い近衛兵が立っていた。青年はやや緊張気味に男に近づいて、おじぎをした。

「…王がお呼びです。お戻り下さい」

リシリーと呼ばれた男は若者を一瞥し、フツと鼻で笑った。

「新入りか？偉く堅くなっておるな」

「あ、は、はい！本日からお城の警備につくことになりました」

若者は頭を下げたまま、声を震わせて 答えた。

「そんなに緊張していては、王をお守りすることはできんぞ」

「はい！…申し訳ありません」

「いつまで顔を下げている」

若者は慌てて顔を上げた。

「お前の名前は何と？」

「ジョージ・サンダーソンと申します」

リシリーは、ジョージの顔をじっと見つめた。

「ふむ、お前は今喜びに満ちた顔をしておるな。愛するものと名誉の仕事を得た印が見える」

「はい！もうすぐ結婚する予定です」

ジョージの顔がぱっと笑顔になった。

「フツ、そんなことは聞いておらん」

「あ、申し訳ありません！」

「名誉ある仕事をまっとうすることだな」

「はい」

リシリーは、身を低くしているジョージの前をゆっくりと通り過ぎる。

（この男の影に、流れ者の魔法使いの気配を感じるが…）

「街の警備を強化しておけ。立て札の文字が消されていたら、魔法使いが忍び込んだという噂が広まっている」

通り過ぎざま、リシリーはジョージに忠告した。

第十二話（後書き）

登場人物の名前を考えるのに、いつも苦労します。結局最後は思いつき：^^；もう少し時代や世界を考えてつけたいと思うんですが、良い名前が浮かびません。ありきたりだなあゝ

第十三話

叔母の用事で知人の家に届け物をした帰り、エリーは数人の近衛兵達に出会った。馬に乗りゆつくりと街頭を進んでいる。その中の一人の騎士の顔を見て、エリーは立ち止まった。リリーの婚約者のジョージだ。お城の警備の仕事に就いたという話は、リリーから聞いていた。

エリーはジョージの元に駆け寄った。その姿を見たジョージは手綱を引いて馬を止めた。他の騎士達には先に行くようにと告げる。

「ジョージ、久しぶりね。お城の仕事はどう？」

「毎日緊張してばかりだよ。緊張しすぎて、最近はよく眠れない。食欲もないんだ」

ジョージは軽く吐息をついた。

「大丈夫なの？ 顔色もよくないわね：リリーが心配するわよ」

「そうだね。もうすぐ結婚するんだし、もっとしっかりしないと」

「そうだ、良い薬草があるの。疲れによく効くのよ。後でリリーにことづけておくわ」

「ありがとう。エリーはよく気が利いて働き者だな。きっと良い奥さんになれるよ」

「え？…」

ジョージは微笑んだ。

「リリーから聞いたよ、エリーにもようやく恋人が出来たんだって。エリーは可愛いのに男嫌いだから、なかなか恋人が出来ないとリリーも心配していたんだよ」

「ち、違うわよ！ ダリルはただの旅人、宿屋のお客！ リリーが勘違いしてるだけよ！」

「そんなにムキにならなくても」

「……」

エリーの頬が赤く染まり、うつむいた。

「ごめん、ごめん。今度サムを連れて家に遊びにおいで。そのダリルも一緒にね。リリィや君たちと一緒にいる時が一番くつろげる。……じゃ、警備に戻らないと」

ジョージは馬の腹を軽く蹴った。

「街に魔法使いが入り込んだらしくて、警備に回っているんだ」

「！魔法使い……」

エリーは、はっと息をのむ。

「そのうちエリーの宿屋にも警備に行くことになる」

「……」

ジョージは他の騎士達の元に馬を走らせていった。

エリーはその場に立ちつくし、不安げにその後ろ姿を見守った。

「素晴らしいナイトだな。君の憧れの的かい？」

ビクツとしてエリーが振り返ると、そこにダリルが立っていた。

「容姿端麗、頭脳明晰。だが、少々繊細すぎる。もう少し心を鍛える必要があるな」

「人のことを分析している場合じゃないわよ。あなたお尋ね者になっっているみたいだから」

「そのようだね」

「分かっているなら、そんなあやしい格好で出歩かないでよ！あなたは目立ちすぎるわ！」

「怒った顔の君は魅力的だな」

「！……」

言い返す言葉を失ったエリーの顔の前に、ダリルは木の棒を差し出した。

「魔法の勉強は、はかどっているかい？初心者杖を使った方がいい」

「……これ、魔法の杖なの？……」

エリーは声を低める。

「その通り、杖には魔法の力が込められているからね」

エリーは回りを気にしながら杖を受け取る。

「昔、僕が使っていたものだ。君にあげよう」

「…あの、私にも魔法が使えるようになるのかしら?…」

「珍しく弱気だね」

ダリルはフフツと笑った。

「厳しい修行と、強い思いがあれば、必ず使えるようになるさ」

「……」

エリーは魔法の杖を握りしめた。

「さてと、僕はもう暫く探索に向いてみるか」

「ダリル、気をつけて。ジョージは宿屋にも来るって言ってたから」

「偉大な魔法使いは簡単に捕まったりしないさ。ああ、それと僕はまだ結婚をするつもりはない。君がどうしても結婚したいというなら別だが」

「!…私だってあなたと結婚なんかしたくないわよ!」

エリーの叫び声を背に受けながら、ダリルは笑って去っていった。

第十四話

白い雲の浮かんだ青空を一羽のカラスが高く飛んでいた。カラスは大きく羽ばたきながら、街の中心に位置する壮大な城の方へと向かって行く。そして、城の中心まで来ると、ゆっくりその上空を旋回した。

（予想以上に警備が嚴重だな…）

城の正面へ続く堀の対岸から、ダリルはそびえ立つ城を眺めた。堀に架かる橋の向こうは、堅く門が閉ざされていた。門の前には二人の厳つい門番が、微動だにせず見張っている。ダリルは正面を避け、大きな堀の回りを歩いた。高くて頑丈な堀からは、城の中の様子は全く見えない。だが、多分堀の内側には等間隔で兵士が見張っているはずだ。ダリルはふと立ち止まり、神経を集中させて呪文を唱えた。しばらく目をつぶりじっとたたずむ。

（…ダメか。何も見えてこない）

城の内部の様子を探ろうとしたが、頭の中には何の情景も浮かんでこなかった。ダリルは、フーと息を吐く。

「認めたくはないが、まだまだ修行が足りないようだな…」

ダリルは空を見上げ、ピューツと指笛を鳴らした。城の上を旋回していたカラスが、ゆっくりとダリルの元に舞い降りて来る。そして、カアと小さく鳴くとダリルの肩にとまった。

「カラス君、後でじっくり城の様子を教えておくれ。どうもここでは魔法に集中出来ない。魔法の力を抑えられているようだ」

カラスはダリルを見て、二、三度頷いた。

「本当にこの国には魔法使いはいないのか？…何か大きな力を感じるんだが…」

その日の夜遅く、エリーは厨房のかまどで薬草を煮込んでいた。店は閉店し、叔母夫婦も部屋に引き上げていた。ぐつぐつ煮える鍋

をゆっくりとかき混ぜる。

（見た目は気持ち悪いけど、効き目は最高よ。でも、酷い匂いね…）
エリーは思わずせき込んだ。緑色のドロドロした液体が、きつい匂いを放っている。

と、厨房の中にヒューッと風が吹き込んできた。

（おかしいわね。ドアも窓も閉めたはずなのに）

エリーが後ろを振り向くと、そこにカラスを連れたダリルが立っていた。

「ビックリした…どうやって入って来たの？」

「僕が魔法使いだということをお忘れかい？」

ダリルはフツと笑う。

「泥棒の真似はしないでね」

エリーはまた薬草作りに戻る。

「それにしてもすごい匂いだな」

「良薬は口に苦いの。あなたの魔法よりずっとよく効くから、これを飲めば一晩で元気になるわ」

「ふーん、今日はやけに疲れたから試してみたい気分だな…」

ダリルはぐつぐつと煮えたぎる鍋を覗き込む。

「ダメよ、これはジョージの薬だから。だいたい、こんな遅くまで何してたのよ」

「まあ、色々とね…やっぱりやめておこう。僕にはとても飲む勇氣はないね。カラス君はどうだい？」

カラスはクビを傾げる。

「それにしても、鍋をかき混ぜる君の姿は魔女のようだね」

ダリルは大きくあくびをする。

「お休み、未来の魔女さん」

「それは誉め言葉なの？…」

エリーが後ろを見た時には、もうダリルの姿はなく、奥の階段を上がる音がした。

（本当にお疲れのようだわ…私も早く作りあげなきゃ）

エリーは銅を一混ぜした。

第十五話

翌朝。まだ開いていない店の椅子に座って、サムは熱心に絵を描いていた。モデルはカラス。カラスは椅子の背に止まって、じっとサムを見つめている。モデルになるのが、まんざらでもなさそうだ。エリーはそんなサムの姿を見つけて、近づいてきた。手には緑色の煎じ薬の入った籠を抱えている。

「市場に行く？ 帰りにリリーの家に寄るわ」

エリーはサムを振り向かせて、そう告げる。サムは少し迷った表情を見せる。

「リリーにいたいけど…いまカラスくんをかいてるから、きょうはやめる。あとでダリルもかくんだ」

「そう、じゃあ一人で行って来るわ。ダリルはまだ寝てるのかしら？」

「うん、まだねてるよ。だからさきにカラスくんをかくんだ。ダリルはもうすこしねたいんだって」

「ふーん、昨日遅くまで遊んでいるからだわ。自分の病気は自分で治せないのかしら？」 「…？ ダリルは、てじなしじゃなくて、おいしゃさんなの？」

「…ううん、どちらでもないわ。じゃ、行って来るわね」

（煎じ薬がもっと必要のようね）

エリーは籠を抱えて店を出ていった。

「カラスくん、ダリルのしごとはなんなの？」

サムはカラスに問いかける。カラスは困ったように首を傾げた。

エリー達の住む「旅の宿」は、中心部からだいぶ離れた郊外にある。国の境に近い下町だ。一方、リリーの家は中心部の城の近くに位置していた。下町とは雰囲気の違い、貴族が多く住んでいる。リリーも上流階級の家柄だが、エリーとは幼い頃から親しくつき合

っていた。貴族のお嬢様達は、大抵下町の人間とは付き合いたがらないが、リリイ達一家は気さくで親しみやすかった。

「昨日作った煎じ薬よ。ジョージに飲ませてあげて」

リリイの部屋で、エリーは煎じ薬の瓶を取り出した。

「見た目はちよつと気味が悪いかもしれないけど、効き目は最高よ。これを飲めばジョージも元気になるわ」

「ありがとう。渡しておくわ」

リリイは微笑むと、瓶を受け取った。

「お城の仕事は大変みたいね。でも、ジョージならきっと上手くやっていけるわ。そのうち王様にも気に入ってもらえるんじゃないかしら」

「そうだと良いけど…。今はリシリー大臣に仕えているらしいわ。長年国王に寵愛されている、とても有能な方らしいの」

「そうなの？ 素敵じゃない！ リリイもサンダーソン婦人としてお城に招待される日もくるかもね」

「…うん…」

リリイの表情が曇る。

「？ 嬉しくないの」

「リシリー様は優秀な方だけど、時々人を寄せつけないような厳しい表情をされるらしいわ。ジョージはいつも緊張して内心ビクビクしているのよ」

「ふーん、…もう少し心を鍛える必要があるのね」

エリーはダリルの言葉を思い出す。

「え？…」

「ジョージは優しい人だから色々気を遣っちゃうのね。でも、大丈夫よ。この煎じ薬とリリイの愛があれば」

「そうだと良いけど。そう言えばこの間の「彼」の話聞かせてよ」

「彼？…」

「ほら、黒いマントに黒い帽子で黒いカラスを連れたハンサムな」

「リリイ、誤解しないでね。彼はただの宿屋のお客だから」

エリーは口をとがらせる。

「ジョージにまで話したでしょ」

「でも、あなた達とても楽しそうだったから」

リリイは微笑む。

「彼は何をしている人なの？どこから来たの？」

「知らないわ…」

事実、魔法使いであること以外、エリーはダリルのことをよく知らなかった。

「神秘的な方だったわ。今度みんなでパーティを開きましょうよ。色々お話も聞きたいわ。どんなお仕事をされてるのかしら？」

「ただの魔！…魔術師よ…」

「魔術師なの！？…ああ、それであんな格好してるのね。だってらぜひともパーティに招待したいわ。どんな手品を見せてくれるかしら？楽しそうね」

「……」

（やめてー！！本物の魔法使いに人前で手品なんかさせないでよ！）
一人浮かれているリリイを横目に、エリーは心の中で叫んでいた。

第十五話（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

人物の情景描写を初めにしてなかったので、想像しにくいですね。
（^^;）イメージは読者の方々に任せします。徐々に書いていきたいと思っています。

第十六話

その日の夜遅く。エリーはダリルに貰った「魔法の杖」と「魔法の本」を抱えて、ダリルの部屋の前に立っていた。ためらいがちにドアをノックする。さっきまで「魔法の本」を読んでいたが、どうも上手くいかなかった。もう一度ノックしようとした時、ドアがすつと内側に開いた。

「ノックするのは初めてだね」

奥からダリルの声がした。

「入ってもいい?」

「ドアは開いてるよ」

エリーが室内に入ると、ダリルはベッドに横になっていた。ダリルが軽く指を振ると、ドアがパタンと閉まった。

「魔法の勉強が上手くないんだろ? 立ってないでこっちにおいでよ」

「…一応あなたは男で私は女だから」

ダリルはククツと笑うと、ベッドから身を起こした。

「裸で寝ていたわけでもあるまいし。今までそんなこと意識してなどなかったらう? それとも僕のことを気になり始めたのかな?」

「違うわ」

エリーはつかつかと歩み寄ると、ベッド脇のテーブルに魔法の本と杖を置いた。

「一人では無理みたい:魔法の勉強なんて出来ないわ」

「フーン、それでダリル先生に教わろうとしたんだね」

「あいにく、他に魔法使いの知り合いがないから」

エリーは口をとがらせる。

「弟子はとらない主義だけどね。修行には長い年月がかかるんだが、君は僕をずっと引き留めておくつもりかい?」

「それは……でも、あなたが長い年月をかけた修行をしているよう

には見えないんですけど。あなたの魔法って手品師と変わらないんだもの」

エリーは腕組みしてダリルを見下ろす。

「……」

ダリルがまた何か言い返すだろうと予想したエリーだが、彼は何も言わなかった。そして魔法の本をそっと手に取った。

「…あの、あなたがまだ若いからってという意味よ」

ダリルはフツと笑った。

「年など関係ないさ。有能な子供の魔法使いもいれば、年を取っているだけの無能な魔法使いもいる。もちろん長い年月をかけた修行の方が、それだけ優れた魔法が修得出来るがね」

「私は…私が習いたい魔法は「治癒」の魔法よ。あなたが私の傷を治したみたいに、病氣や怪我が治せる魔法を知りたいの」

「治癒魔法は、それ程難しくはないよ。魔法使いじゃなくとも、治癒能力のある人はいるからね」

「じゃあ私にも出来るかしら？」

エリーの顔が明るくなる。

「サムの耳を聞こえるようにすることも出来る？」

「それは難しいな…魔法でも全ての病氣を治すことは出来ない。だが、サムの耳は治らなくても、君は心でサムの声を聞くことが出来るようになるさ」

「あなたがやってるみたいだね。でも、人の心を読むのは怖い気がするわ」

「まあね。時には聞きたくない声も聞こえてくる。そういう声は聞かないようにすることも出来る…」

ダリルは突然口をつぐむ。

「どうしたの？」

ダリルはシッと口に指をあてて耳をすませた。

「誰かが来る…」

第十七話

「…？何も聞こえないわ」

エリーは窓辺に近づき、窓から裏庭とその向こうに続く道路を見渡した。辺りは闇の中で寝静まっている。

「…君の友達のリリィだ。かなり慌てている」

ダリルは目を閉じたまま答える。

「リリィが？…」

エリーはもう一度通りに目を向けた。

「あっ！…」

通りの向こうから蹄の音が聞こえてくる。音は段々近づき、馬に乗ったリリィの姿が現れた。

「リリィだわ！どうしたのかしら」

エリーとダリルは顔を見合わせると、すぐに部屋を出てリリィの元に向かった。

「エリー！…」

宿屋の店先に、取り乱し今にも泣きそうな顔をしたリリィが立っていた。

「一体どうしたの！？こんな夜遅く一人で馬を走らせるなんて危ないじゃない！」

「お父様もお母様も出かけていて、私どうしたらいいか…」

リリィは緊張の糸が切れたように、わぁっと泣きだした。

「リリィ…」

エリーは優しくリリィを抱きしめた。

「落ち着いて、何があったの？」

「何も言わなくてもいいよ…」

二人の側に立っていたダリルは、泣きじゃくるリリィの様子をじっと見つめていた。

「……分かるの？」

エリーはダリルを見る。彼は真剣な顔をして考え込んでいた。

「とにかく、リリイの家に急ごう。ジョージの身に何かあったみたいだ」

「ジョージに!…」

「…夕方ジョージが家に来たの…そしたら、そしたら突然倒れて…お医者様にも診て貰ったしエリーの薬も飲ませた…でも…」

リリイはしゃくり上げながら、ようやくそれだけ言った。

「分かった、荷馬車を出すわ。一緒に戻りましょう。リリイもう大丈夫よ」

（ダリル、助けて）

エリーはダリルの目を見つめて、心の中で呟いた。

（最初からそのつもりさ。レデイの涙には弱いんでね）

ダリルは微笑むと軽くウィンクした。

第十八話

ジョージはベッドの中で、苦しそうに呻いていた。顔色は悪く額には汗がにじんでいる。エリーとダリルはベッドの側に近寄った。

「ジョージ、大丈夫?…」

エリーが声をかけると、ジョージは薄く目を開けた。

「エリー…わざわざ来てくれたのかい? 平気だよ、たいしたことはない…」

そう言いつつ、ジョージは苦しそうに咳をした。

「喋らない方が良い。かなり具合が悪いようだ」

ジョージを見下ろしながらダリルは言う。

「…彼は?…」

ジョージがダリルに目を向けた時、リリイが洗面器とタオルを運んできた。

「私一人じゃ心細いから、一緒に来て貰ったの」

リリイは水で絞ったタオルで、優しくジョージの額の汗を拭った。「家の宿屋に泊まっているダリル。魔術師なんだけど、医学の知識も少しあるの。だから、診て貰おうかと思って…」

ダリルが何か言う前に、エリーは早口でそう伝えた。

（君はウソが上手だね）

ダリルの心の声が聞こえ、エリーは咳払いした。

（そう言うことにして! 早くジョージを診てよ）

エリーはダリルを横目で睨んだ。ダリルはフツと笑う。

「もう大丈夫。僕は医者じゃないが、名医並の腕はあるからね」

そう言い、ダリルはジョージの服のボタンをはずし胸をはだけけると、そっと素肌に手をやった。その様子をリリイは心配そうに見つめる。

「お願いします! お金はいくらでも出しますから、彼を助けて…」

「…大丈夫、命に別状はない。ちよっとたちの悪い病原菌が入った

ただだ…」

「リリイ、後はダリルに任せて。あなたはもう寝た方が良いわ。今度はリリイが倒れるといけないから」

エリーはリリイの肩を抱いた。ダリルの魔法はなるべく見せたくない。

「明日にはきつと元気になってるからもう安心して」

「…ええ」

ようやく笑顔を見せたリリイを連れて、エリーは部屋を出ていった。

エリーがリリイを寝かせ戻って来た時、ダリルはベッド脇の椅子にぐったりともたれ掛かっていた。

「ジョージの具合はどう？」

「眠っている。悪い根源は消したから、もう大丈夫だろう。まあ、かなり体力を消耗しているから、明日一日は休んでいた方がいいだろうね」

「ありがとう」

エリーは、ジョージの安らかな寝息を聞いてほっと安心した。

「私たちも帰りましょうか？」

「少し休ませてくれないか…治療の魔法は気力と体力を使うんでね。病気や怪我の大きさによって、その力も大きくなる」

ダリルの瞼は今にも閉じそうになっている。

「大丈夫なの？」

「ほんの少し眠れば回復するさ。向こうのソファで眠って来るよ…」
ダリルはよろけそうになりながら、椅子から立ち上がった。

「僕は偉大な魔法使いだから回復も早い…」

減らず口をたたきながら、おぼつかない足取りで歩いて行くダリルを見て、エリーは微笑んだ。

（本当に偉大な魔法使いさんなのかしら？）

第十九話

どれくらいの時間が立っただろう？ ジョージが眠るベッド脇の椅子に座って、エリーはうとうとと眠りかけていた。日はまだ昇っていないが、夜明けは近い。

（朝まで眠るつもりなのかな？）

隣りの部屋に行ったダリルはまだ戻って来なかった。ベッドの中のジョージは、スヤスヤと気持ちよさそうに眠っている。

「もう大丈夫ね」

エリーはほっと安心して、ジョージの寝顔を見つめた。そして、洗面器のタオルを絞り、そっと額を拭く。

「…リリィ…」

不意にジョージの手が伸びて、エリーの手を握った。ドキッとしてジョージを見るが、彼は眠ったままだった。

（寝ぼけてるの？ リリィと勘違いしてるのね…）

そう思いつつも、ジョージの手の温もりを感じ、エリーの鼓動は早まった。

（何考えてるんだろう私…）

エリーが手はずそうとした時、ジョージはエリーの腕を引いて自分の方へ抱き寄せた。エリーはジョージの胸に顔を埋めるような格好になった。ジョージの規則正しい寝息に合わせて、胸がゆっくり上下する。

「……」

ジョージの手は優しくエリーの髪をなでた。ジョージの温もりと優しさを間近で感じる。早鐘のように高まる鼓動を抑えながら、エリーはそのまま瞳を閉じた。

（そろそろ帰ろうか？…）

エリーがジョージの胸の中でまどろみかけた時、不意にダリルの

心の声が聞こえてきた。エリーは、はっとして身を起こす。入り口のドアに背をもたせかけ、ダリルが腕組みして立っていた。じつとエリーを見ている。

「ね、眠っちゃってたみたい……」

エリーは慌てて椅子から立ち上がり、ちらりとジョージを見てダリルの元に歩いて行く。ドキドキする胸と紅潮する頬を必死で押さえながら。

「いつからそこにいたの？」

「少し前からね。君があまりに気持ちよさそうに眠っているもので、起こせなかった」

ダリルはフツと笑う。

「!……」

エリーはダリルを押しのと、部屋のドアを引いた。

(ジョージのことが好きなのか?)

エリーの心がズキンと痛んだ。ドアを持つ手が震える。

(リリイより先に好きだと言えなかったんだろう?)

エリーは顔を上げると、ダリルの頬をバチンと打った。涙が溢れそうになる。

「勝手に人の心に踏み込んでこないで!」

エリーは足早に部屋を出ていった。

「……」

ダリルは叩かれた頬をさすりながら、軽いため息をついた。

エリーはダリルを置いて、一人荷馬車を走らせていた。涙があふれ出て止まらなかった。リリイの家のパーティで、エリーは初めてジョージに出会った。その時はまだ、リリイもジョージを知らなくてお互い初対面だった。初めて人を好きになった。エリーの初恋だった。ドキドキしながらリリイに打ち明けようとした時、リリイに先に告白された。『エリー、私好きな人が出来たの』

(どうしようもないじゃない!……ジョージと私は身分が違いすぎる

し、リリイは私の親友だもの…それに、ジョージが愛してるのはリリイだから…)

もう吹っ切れたはずだった。ようやく心からリリイ達を祝福出来るようになった。そのつもりだった。

(バカ!ダリルのバカ!…)

ダリルに対する怒りと自分に対する怒りがこみ上げてくる。日が昇り始め、うっすらと明るくなりかけた街を、泣き濡れながらエリィは駆けていった。

第十九話（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

ダリル二回目のビンタ！^^；色恋の話は苦手なのですが、なんとなく書いてみたくなりました。

第二十話

日が昇り街が活気づいてきた頃、ダリルは歩いて宿屋に戻って来た。叩かれた頬の痛みと同じくらいに、胸がチクチクと痛んだ。エリーの心の痛みがダリルにも伝染したようだ。

（全く、人の心を乱してくれるお嬢さんだ。こんなことでは修行にならないな……。そろそろこの街を引き揚げることにするか……。長く居てもろくなことは起こらないだろう）

この国に入った時から、不吉な影は感じていた。だが、それを上回る好奇心がダリルの足をここに向かわせた。

（魔法使いは必要のない国か……）

ダリルが店に入ると、サムがテーブルを拭いて掃除をしていた。

（今日はサムが掃除をするのかい？）

ダリルがサムの心に質問すると、サムはテーブルを拭く手を止めて振り返った。

「うん！ エリーはきぶんがわるいって、へやでねてる。おじさんとおばさんは、いちばにいったよ」

「ふーん……」

ダリルはサムが手にしている雑巾を見つめながら、呪文を唱え指をパチンと鳴らした。すると、雑巾はサムの手を放れ、勝手にテーブルを拭き始めた。サムはビックリして目を丸くする。

「すごい！」

（掃除は雑巾に任せておけばいいさ。それより、エリーはどんな具合なんだ？）

（よく分からない。布団かぶってベットにもぐったままだもの。少し寝たら気分は良くなるって言ってた）

サムは心で答えながら、目はじっと雑巾を追っている。

「……」

ダリルは腕組みして何か考えていた。

（サム、また絵を描いてくれないか？ そうだな… バラの花が良い）

（？ 良いよ。花はちよつと難しいけど描いてみる）

（花には横笛を吹かせておくれ）

「よこぶえ？」

サムは不思議そうな顔をしてダリルに目を向けた。

「そう、横笛を吹いてる赤いバラの花だ」

ダリルはフフツと笑った。

「酷い顔……」

ベッドから起きあがって手鏡を手にしたエリーは、鏡の中の顔を見てため息をついた。寝不足の上に泣き腫らした目は膨れ、着替えもせずベッドに飛び込んだ髪はくしゃくしゃに乱れていた。はずれかけた髪の毛のリボンをほどき、手櫛で髪をとかす。

涙はもう枯れていたが、胸の中はもやもやしていた。

「バカよね… あんなどこダリルに見られるなんて…」

鏡の中の自分に言う。

「…ジョージとはしばらく顔を合わせられない…」

昨夜のことを思い出すと、まだ胸がドキドキする。エリーはもう一度大きいため息をもらすと、鏡を置いて手で顔を覆った。

と、ドアの向こうから笛の音が聞こえてきた。軽やかで楽しげな笛の音が響いてくる。

「何かしら？」

ベッドから起きて部屋のドアを開けてみると、バラの絵が宙に浮いて横笛を吹いていた。

「！……」

エリーは驚いて口に手をあてた。

「ダリルの仕業ね」

ムツとしたエリーだが、ふわふわした赤いバラが葉っぱを手の代わりにして、横笛を吹いている姿を見ていると笑いがこみ上げてくる。体をくねらせながら演奏を続けたバラの絵は、演奏が終わると

フルートを葉っぱの手に持って深々とおじぎした。その様子が滑稽で、エリーはいつの間にか笑っていた。

第二十一話

夕暮れ近くになり、エリーは居酒屋の仕事を手伝いに部屋から下りてきた。今日は一日部屋に籠もっていたが、気持ちはいぶ楽になってきた。

「エリー、具合は良くなったかい？」

叔母は心配そうにエリーに声をかけた。

「うん、もう大丈夫。心配かけてごめんなさい」

「それなら良かった。最近また良くない流行病が広がってるようだから心配したよ。元気なエリーまで病気になったかと思った」

「元気だけが私のとりえだから」

エリーは笑顔で答えた。

「今日はサムも手伝ってくれたんでしょう？」

「ああ、それとあの黒い服着たお客さんも手伝ってくれたよ」

「……」（ダリル？）

「なんかうさんくさいお客さんだねえ。旅人にしちゃ長いこと泊まってるから、手伝った代わりに宿代払わないつもりかと思ったよ」

「そんなことはないと思うけど……」

「ま、後二、三日で旅立つつもりだって言ってたから、構わないがね」

「……そう」

（ようやく出ていく決心をしたのね……この国は早く出ていった方がいいわ）そう思いながらも、一抹の寂しさがエリーの心をよぎった。

「あ、サムがね、変なことを言うんだよ。横笛の音楽を聴いたって「横笛の音楽？」」

「そうさ。聞こえるわけがないのにね、えらく嬉しそうに話していたよ」

「……」

おかしなバラの花が演奏していた横笛の曲を思い出し、エリーは

微笑んだ。何か心が癒されるような楽しげな曲だった。

「サムはきつと心の中で聴いたのよ」

心の中でなら、どんな音楽もどんな言葉も聞こえる。話すのも随分楽になる。いつかサムと心で話がしたいとエリーは願った。魔法に対する関心が一層募っていく。

第二十一話（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます！今回短いです。（＾＾；）ラストに向けての展開は頭の中で出来てきましたが、なかなか文章が追いつきません。＾＾；長く書いてると愛着わいてきて、書き終えたら寂しいだろうなあなんて考えてます。

第二十二話

翌日の午後、リリイが馬車に乗って宿屋に訪ねてきた。エリーは仕事の手を休め、リリイを出迎えた。なんとなく気まずい思いがある。けれど何も知らないリリイは満面の笑顔を浮かべていた。エリーはリリイをまだ開いてない居酒屋のテーブルに案内した。

「ありがとう、エリー。ジョージはすっかり元気になったわ」

「そう、良かった…」

「ダリルさんはいらっしゃる？ どうしてもお礼が言いたくて来たの」
「出かけているわ。夜まで帰って来ないかもしれないわね」

「そうなの、残念ね」

リリイは手元から紙包みを取り出し、テーブルの上に置いた。

「この間のお礼よ。ダリルさんに渡してもらえる？」

「…治療費ってこと？」

「ええ。いくら支払えばいいかわからないけれど、普通のお医者様より優れた腕前なのは確かだわ」

「……」

（魔法でお金もうけしていいのかしら？）

包み紙の中には、きっと大金が入っているのだろう。エリーは少し複雑な気分だった。「エリー、お願いね」

戸惑ってるエリーにリリイは声をかけた。

「…あ、うん。渡しておくわ」

エリーは包み紙を受け取った。

「ジョージの話だと、お城の近衛兵の方の中にも体調が悪い方がいるらしいの。良かったらダリルさんに診て貰えないかしら？」

「そう言えば、叔母さんも最近悪い病気が流行ってるって言ってたわ…」

「そうなの？ …悪い伝染病じゃなければいいけれど…」

「……」

5年前に流行った伝染病のことを思い出し、二人は不安な気持ちになった。エリーの両親や多くの人々の命を奪った病気。あの時魔法の力があれば…。

「大丈夫。今度はきつと助かるわ。…医学だってあの時より発達したんだから」

「…そうよね」

二人は不安な気持ちを紛らせるように微笑んだ。

「あのね、エリー。ジョージが私におかしなことを言うのよ。病気で倒れた晩、徹夜で看病してくれてありがとうって」

「……」

エリーはあの晩のことを思い出し、ドキツとした。

「私は先に寝ていたし、エリーもダリルさんも帰っていたんだから誰もいないはずでしょう？」

「…そうよね」

「でも、ジョージは私が夜明けまで看病してくれたって言うの。きつと、熱にうなされて夢でも見ていたんじゃないかしら？」

リリィは可笑しそうに笑った。

「そうね…夢を見ていたんだと思うわ」

エリーは苦笑した。

第二十三話

夜が更けその日の日付が変わる頃になって、ようやくダリルは戻ってきた。エリーは店の後かたづけをし終え、休もうとしていた時だった。

「毎日夜遅くまで何をしてるの？」

「魔法使いにはやらなきゃならないことがたくさんあるのさ。仕事というか使命だね」

「そうなの？ 私には遊んでいるようにしかみえないけど」

エリーはポケットの中から、リリイが持って来た紙包みを差し出した。

「リリイがあなたに渡して欲しいって。お礼を言いに来てくれたのよ」

「残念だな、会ってゆっくり話がしたかった。あんな素敵なレディは滅多にいない」

ダリルは包みを受け取り、中を確認した。紙幣が何枚も入っている。エリーは大金を見て目を丸くした。

「そんなにたくさん？…受け取るつもり？」

「誤解しないでくれよ。僕はお金目当てに助けた訳じゃないからね」

「じゃあ返す？」

「フン：せっかくの好意だからもらっておくことにしようか」

ダリルは微笑むと包みを懷の中にしまった。エリーは軽く吐息をつく。

「魔法使いさんにもお金は必要なのね。で、ダリルあなた宿代を支払うお金は持っていたんでしょね？ 叔母さんが心配していたわ」

「もちろん、これで十分支払えるな」

「？そのお金以外持ってなかったの！？」

「僕は魔法使いだよ。お金を取り出すことは出来ないが、お金を支

払ったと人に思わせることは出来る」

ダリルは平然と言ったのける。

「あきれた…それじゃ詐欺師と同じだわ」

「一緒にしてもらっては困るね。詐欺師は魔法を使えない」

「…私もう寝る」

ダリルとのやりとりにより、エリーは疲れる。

「こんなに早い時間にもうお休みかい？」

「早い？もう十二時は過ぎたわよ。あなたと違って私は早起きしなきゃいけないんだから」

エリーは頬を膨らませる。

「君と僕の最後の夜だから、夜間飛行に出てみないかい？」

「最後の夜？…」

「君のお望み通り、明日にはここを立つよ。正確にはもう今日だけだね」

「…そう」

口ごもったエリーを見て、ダリルはフツと笑う。

「僕との別れが寂しいのかな？」

「違う…あなたは早くこの国を出ていった方がいいから…ただ、もう少し魔法のことを知れたかっただけ…」

ダリルの緑色の澄んだ瞳に見つめられると嘘がつけなくなる。別れは寂しい。

「…リリイが、病気になった兵士さんを診て貰えないかって言ってたし…」

エリーはダリルから目をそらす。

「残念だけれど、それには応じられないな。僕は医者ではないから、病人の治療ばかりは出来ない」

「そうよね、あなたは魔法使いなんだから…だから、この国に居てはいけないわ」

ダリルは微笑むと、エリーに手を差し出した。

「お嬢さん、箒に乗って空を飛んでみましょうか？」

(最後までキザね)

そう思いつつ、エリーは微笑んで手を差し伸べた。

「ええ、行きましょう」

第二十三話（後書き）

たくさんの方に読んでいただいているようで、感謝しています。随分長くなりました：（^^；）もう少し？続きます。最後までお付き合いですませ。

第二十四話

「ねえ、本当に箒で空が飛べるの？」

月明かりに照らされた人気のない裏庭で、箒に乗ったエリーは不安げにダリルを見た。

「魔法使いが箒で空を飛ぶのは、基本中の基本だよ」

そう言いながら、ダリルも箒にまたがる。

「この街で見つけた質の良い箒だから、飛び心地は最高だと思うよ」

「：あなたがタダで手に入れた箒ね」

「さあ、出発しようか。意識を箒に集中して」

ダリルは箒に向かって呪文を唱えた。

「ひゃ！」

いきなり箒が宙に浮いて、エリーはバランスを崩しそうになる。

「もっと集中して、魔女になった気分になるんだ」

ダリルは声を立てて笑う。

「高度を上げる。ついておいで」

「！急に浮かぶからビックリしただけよ」

バランスを持ち直させたエリーの箒は、空高く舞い上がる。

「きゃあ！！急に上げないでって言ったでしょ！」

ダリルの笑い声と共に空高く上がった二つの箒は、二人を乗せて夜空を飛び立った。

街の家並みが小さく見える。点在する街明かり。月の光を浴びて空に近づいたエリーは、感動で胸がいっぱいだった。箒に乗るコツをつかみ恐い気持ちは消えていた。街の中心地に向い、壮大な城が見えてきた。

「あの丘の上に着地するよ」

城と正面に向き合う小高い丘を目指して、ダリルは進んだ。エリーも後に続く。そのままふわっとダリルは着陸した。エリーは意識

を集中させ箒を握りしめて丘に突入したが、勢いあまって箒ごと丘に転がった。

「痛ーっ！」

思い切り足をぶつけ、ドレスは草まみれになる。

「まだまだ練習が必要のようだね」

ダリルはエリーに近寄ると、笑いながら手を差し伸べた。エリーは軽いため息をつき、ダリルの手を介して立ち上がり、ドレスの草を払った。

「飛んでる最中に失敗したら死んじゃうわよ」

「空の飛び方は魔法の本にも書いてある。勉強することだね」

「この丘は眺めが素敵ね。お城がこんなに近くに見えるのね」

エリーは、目の前に浮かぶ壮大な城に目を移す。月明かりに映える城は美しい。

「ここはこの国の一番のお気に入りさ。大抵ここで過ごしていた」

「そうなの？お城の方にも飛んでみた？」

「いや：城には魔法使いを寄せつけないようなバリアがある。これ以上は近づけない」

「ふーん、そんな警備も出来るのかしら？」

「普通の人間には出来ないさ：」

「？：」

「魔法使いなら出来るかもしれない」

「魔法使いなんてこの国にはいないわよ」

「……」

ダリルは空を見上げた。夜空には宝石箱のような星がきらめいている。エリーも空を仰いだ。

「綺麗ね：流れ星がたくさん落ちてる：」

「お嬢さん、僕が君の願いを叶えてあげよう」

ダリルはエリーに目を向けると微笑んだ。

「願い事？：」

「そうだな：おとぎ話のようにきらびやかなドレスや豪華な馬車は

出せないが、宮廷の音楽で踊ることは出来る」

「え?…」

エリーがキョトンとしている間に、ダリルは呪文を唱え始めた。ほどなく回りの木々がざわざわし始め、エリーの頭に美しいメロデイが広がってきた。

「さあ踊ろう」

ダリルは手を差し伸べる。

「私、踊れない」

「音楽に合わせて体を動かせばいい。魔法より簡単だ」

エリーはおずおずとダリルに手をあずける。心地よいメロディが辺り一面に広がって、エリーの顔は自然とほころんだ。ダリルのリードで軽やかに体が動く。満天の星空と草木の心地よい香りは、宮廷の舞踏会よりもきらびやかに思えた。

丘の上でエリーとダリルが野外の舞踏会を楽しんでいる頃、正面の城から夜空を見上げている人影があった。

「美しい星空だ…嵐の前の静けさにならなければいいが…」

リシリは顎をなで、憂いをおびた表情で輝く星々を眺めた…。

第二十四話（後書き）

読んで下さってありがとうございます！ようやく第一部の終了です。第二部はいよいよ事件が展開していく予定です。^^；頑張って書いていくつもりなので、最後までお付き合い下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0729a/>

魔法使いのいない国 第一部

2010年10月8日14時49分発行